

会 議 議 事 録(抄)

会議名	専門学校東京テクニカルカレッジ 第2回 学校関係者評価委員会
開催日時	令和2年 11 月 27日(金) 18 時 00 分～20 時 00 分
会場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下 1 階 テラホール
参加者	外 部 委 員 :12名(委員の氏名・所属等は別添資料参照) 学内関係者 :4 名
配布資料	① 式次第 ② 参加委員名簿 ③ 前回議事録 ④ 令和2年度の学校関係者評価結果 ⑤ 令和2年度第 2 回学校関係者評価委員会 PP 資料
会議録	1. 開会の辞・事務局紹介(事務局) 専門学校東京テクニカルカレッジ井坂副校長の司会により開式が宣言され、配布資料の確認が行われた。 2. 学園側関係者挨拶 学園側の関係者として、専門学校東京テクニカルカレッジ白井校長より挨拶が行われた。 3. 委員紹介 井坂副校長より本日の会議予定の説明のあと、資料②に基づいて委員の紹介が行われた。 4. 議長の選出 本会議の議長については、会則により霜野隆委員長(日本インテリアプランナー協会会長)が担当するところであったが欠席のため、渡邊副委員長(ITBook テクノロジー(株))が議長に選出された。 尚書記として選出されている小野寺委員((株)光英科学研究所)欠席のため、事務局にて書記を代行した。 5. 開催要件の確認 事務局より外部委員 16 名中 12名出席、委任状提出 4 名、総計 20 名。半数以上の参加があることが報告され、本会が成立していることが確認された。 6. 議事 (1)第一号議案:令和2年度第1回会議議事録の内容についての確認 議長は事務局に対し、資料③に基づき前回議事録の確認を指示。井坂副校長から説明があった。その後議事録について出席者に確認を図ったところ、全員一致で齟齬がないことが確認された。 (2)第二号議案:前回の意見指摘事項確認とその改善点(本年度に改訂する自己評価報告書への加筆事項確認) 議長は事務局に対し、前回四号議案審議内容より指摘事項の改善等についての説明を指示。 井坂副校長が資料④に基づき指摘事項の改善状況と自己評価報告書加筆事項について説明を行った。 その後議長はこれらに対する疑義について出席者に図ったところ、全員一致で自己評価報告書への加筆事項に齟齬がないことが確認された。 (3)第三号議案:令和2年度事業計画進捗状況報告(白井校長) 1.Covid-19 への対応について ・初期対応の概要 1/16 国内初感染者、2/4 学内注意喚起、2/16 国内初死亡例、2/28 職員在宅勤務励行 3/6 までに定期考査→その後学生は登校させず。卒業研究制作発表会、国内外研修中止、 3/26-5/1 教職員時差通勤・在宅勤務実施。学務窓口は学生他対応のため、業務を続けた。 ・2020 年度開始 入学式、フレッシュマン研修、新入生保護者会等中止。 5/7 新入生来校させメール、Zoom 等パソコン通信関係設定。 夜間過程すべて授業を遠隔で開始。 5/8 在校生同設定 5/11 より一部授業遠隔で開始 6/1 より対面授業も開始 情報が錯綜し対応に難儀。研修などぎりぎりまで実施できないか検討していたが中止とした。 危機意識をより強く持つて対応することが必要であったと反省。 ただ組織体制として Tree 状の指揮系統だけではなく、web 上の共有関係の構築ができていたので、 各先生方からの種々の対応、自主的なアイデアの提示があり、この二者がうまく機能することで危機に際して素早い対応ができた判断。 ・リモート授業のメリットデメリット メリット: 双方向性ツールによる遠隔授業が実施可能。 授業計画に沿ったリモート授業、評価、機会均等の実施→授業シート・カルテ手法がうまく適合 web 面接等遠隔による就職活動に寄与。(カメラアングル、照明など検討、対応できた) 企業と教室を結んだ遠隔授業、研究会が実施できる。

デメリット:出席は良いが試験結果は芳しくない。

授業のフォローアップが十分にできない(web が切れると関係が完全に切れてしまい、学校で放課後行っているような指導ができない。)、質問がしにくい、実習授業は遠隔困難。

夏休み前までは突然の退学申し出があった。

本人、家庭との関係構築が希薄になっていることによると判断。

上記反省点を生かして授業手法、改善努力を進める。

2. 専門学校を取り巻く状況

- ・高校指導要領改訂→教科・科目の再編成 判断力、表現力、主体性を重視
- ・大学入試選抜方法変更(共通テスト) 質保証
- ・高等教育の無償化実施→要件の設定に対応
- ・リカレント教育充実(生涯学習の必要性)→教育訓練給付金拡充、産学連携

3. 今年度の方針に基づく活動状況

①募集活動に関する報告 :来年度入学者目標 352 名(5.0%増)を目指す

コロナの影響で4月5月見学会は中止となっており、見学者は大幅に減っているが、出願は堅調(現在152名、2019年度150名))。

インターネット出願も9月から開始。

②教育・就職活動に関する報告:退学率5%以下

退学率は現在2.8%。昨年並みであり現状で何とか目標に収まる見込み。教育指導に鋭意努力。

就職内定率 現在88%(昨年度95%) 昨年度に追いついてきている。大学内定率69%

ディプロマポリシー達成の証明としての内定。優良大手企業内定を多く取得。

③自己改善できる学校創り:授業の問題発見・改善手法の開発に関する報告

授業カルテ、履修試験からの問題発見 → 4期、5期各教員担当科目に関して各自解析を実施、レポート提出。各自のレポートを共有し問題発見解決の手法を検討する。

④自己改善できる学校創り:学習成果の見える化に関する報告

授業成果の見える化(出口に関する評価)

クラウド上での就職活動展開(キャリアマップ)、eポートフォリオの充実促進。

学習成果報告会実施について計画。

⑤新しい時代を開く学校創り:新学科2科設立に関する報告(学科イノベーション)

IoTとAI、データサイエンスとAIに関する新学科設立

・データサイエンス+AI科:ビッグデータ分析・予測→問題解決提案スキル

・IoT+AI科:プログラム、デバイス、通信技術→社会の各種問題解決スキル

企業調査、スキル設定、カリキュラムマップ、ディプロマポリシー、履修内容精査。

新学科教育課程編成委員会開催。

業界関係者の方にリッチな内容であるとの評価をいただいている。

年度内学則変更、来年度から募集開始。R4年(2022年)度開講。

⑥新しい時代を開く学校創り:専門人材未来会議開催に関する報告

カリキュラム構成、学科連携による新しい学校創り目標に各分野・業界の専門の方にお話いただき、カリキュラムをどうしていくべきか考える機会を創出

9/8 ①データサイエンスの現在と未来 ②バイオテクノロジーの現在と未来

11/2 ①IoTの現在と未来 ②環境テクノロジーの現在と未来

1/8 ①建築技術の現在と未来 ②XR 現在と未来 予定

非常に刺激的でワクワクする内容であり今後も進めたい。座談会開催や書籍化などの提案もある。

⑦リアルジョブプロジェクトに関する報告

・毎年2期から5期にかけて各科テーマを設定。年度ごとに達成目指し進めている。

建築監督科(教場整備、8階共有スペース美化、教材作成など)、

建築科(学内共用スペース改装計画、長野研修センター改修提案、コンクリート材料実験)

インテリア科(学生寮モデルルームリノベーション提案(後援会企業より依頼))

情報処理科(AI&IoTシステムの開発(Raspberry Piによる検討))

ゲームプログラミング科(ARスマートフォンゲーム&アプリ開発)、

Web 動画クリエイター科(吉祥寺ハロウィンフェスタオンラインイベント企画、

中野区うさぎ飯カレンダー、RJP パーパー制作)

バイオテクノロジー科(学科の認知度向上提案検討、学習環境改善提案)

環境テクノロジー科(緑化、水生昆虫調査、他新たな課題を設定)

⑧その他、学生支援・リカレント教育等に関する意見交換

・新・修学支援制度開始(2020年4月から開始) 現在54名に支援実施。

授業料等の減免と給付型奨学金拡充とのセット、

世帯収入基準と学習意欲確認による支援(ただし採用後も家計状況、学業成績の確認を実施)

・教育訓練給付金(専門実践教育訓練)の継続:

2年以上雇用保険支を払っていた入学者→最大57万円支給。

・専門人材育成訓練制度受け入れ継続:職業実践専門課程の中に公共職業訓練枠を設ける。

バイオテクノロジー科5名、環境テクノロジー科5名、web 動画クリエイター科3名

増枠で受け入れ。

・文部科学省へ「リカレント教育の取り組み動画」を提供。文科省 U-tube チャンネルで公開。

在学生の24%が学びなおしである。社会人が15%、大学を卒業してすぐか途中で辞めて来ている学生が10%近くいる。これは中学、高校、大学と勉強することが目的で、仕事観

がない。また自分を見つめなおすことがない。ある時にふとこれでいいのか？となっているのではないか。このような人が増えている可能性あり。これに対応できるようにしたい。

(4) 第四号議案：審議（取り組みに関する意見交換）

議長は学校の取り組み全般に対する各委員の忌憚のない意見交換を促した。

また井坂副校長より審議の主旨について再度説明があり、自由に発言をいただきたい旨のお願いがあった。以下に各委員の発言概要を示した。

佐々委員(NPO 暮らしとバイオペラザ 21)：

コロナの問題で私ども NPO でもオンラインでの活動を実施。機械に弱いメンバーばかりではあるが、自分たちで配信や動画編集など、よちよち歩きであるがやっている。逆に機械を使わざるを得ないことがプラスになっている点もある。オンラインは相手の顔が見える、ギャラリービューなど利用できる。テクニカルではこれによる学びを共有、オンラインのネガティブな面も検討されているので素晴らしいと思う。オンラインは親御さんに見えていただけ。大学で、学生に授業の一環として町の人を呼んだサイエンスカフェをやらせているが、今年はすべてオンラインでやった。すると学生の親御さんがそれを見て非常に喜ばれている。今後学会でもなんでも子供や孫の活躍が見えるわけである。大勢の人に見てもらえるのも良いが、近くで一番見たい人達、親、祖父母なども視野にいたオンラインの活動が考えられるのではないか。

中村委員(㈱システム・ユー：情報卒業生)：

リカレント教育に関して興味を持った。営業現場の話ですが、コロナになりテレワークが増えた。当初 4,5 月はテレワークになったことで「最先端の企業」というイメージをお客様にももってもらえた。5,7 月テレワークが長くなると、次第に帰属意識が希薄になっている。急にやめる学生の話があったが大手企業でもやめていく人が出てきている。いったん社会人になったけれども、本当にこれよかったのか？と考えてしまっている人がいるのではないか。リカレント教育はそういう人達に、新たに目的をもって進んでもらえるようになる。教育として生きてくるのではと思う。

大塚委員(大塚雄二都市建設設計事務所)：

コロナ下でどう考えるかは重要なテーマである。建築設計の人間としてどう考えていたかお話しします。3 月以降在宅勤務しましたが、人と会うのは制約があったものの個人事業主ですから事務所に行っても家でもほとんど仕事は変わらない。4 月以降の近隣の状況をみますと、駐車場に机をだして仕事していたりと、自宅では仕事の環境が整わないことを目の当たりにした。自宅での暮らし、会社は仕事場。いままでのように通って仕事をするだけではなし、自宅での仕事を考えると、器である住宅を見つめなおす必要を感じた。その見方から教育も「暮らす」ということに関して、どう生きていくか、どのような環境でどのように生活していくか見つめなおす良いきっかけだと考えている。

岸委員(東中野町内会)：

今年は誰も経験していなかった状況である。急に退学してしまう生徒の話は他でも聞いているが、ある程度は仕方ないのではないか。妻の在宅勤務状況を見ると、仕事の仕方にはかなり課題があると感じる。仕事場としての家は全く考えられずに来た。暮らしという点からどうなるかここ半年考えてきた。未来会議の話であるが、社会が安定しないと社会ニーズも安定しない。どんどん変化していく。社会ニーズをとらえて学校創りをするのは難しいかと思う。ただ面白い。何か生まれてくる時代だと思う。未来会議で話されている内容は、わからないなりに面白そうだと感じる。未来会議の議論が、新しい学校のありかた…のような形に収束すると、まあ一般的だなとなるが、未来のことについてのさまざまな角度での話し合いとなると、普通の人にとっても面白い。学校として違う表情を見せられるのではないかと感じた。リカレント教育の動画を見て感じたのは、成績の良い子ほどあまり考えてこなかったのではないかとということ。うまくいきすぎてきた子たちは、もう一度考え直す時代なのではないか。この辺にも対応されているのはとても良いかと思う。

中山委員((有)イブシロン)：

1 にも 2 にもコロナなのかなと感じる。今年は日常の仕事でイレギュラーなことが多かった。コロナの影響をうけて発生する仕事への対応が多かった。飲食店の人と話している。コロナで何が変わったのか？ ニーズが消えたわけではない。お客さんがいないということではなく、店の中で食べないとなっただけ。テイクアウトでの対応をしている。このようにニーズが変化している。世の中の変化で求められることが変わる。それにどう対応していくかが大切。コロナでオンライン対応に変わったというとき、少し先のことを予想しながら生きていくことが重要。これまで対面で気にならなかったが、Zoom や画面での対応となると見栄えが気になる。ということで男性のシミ取りやメイクにニーズがでていく。これは今までなかったニーズ。学生さんも就職活動で、面接がオンライン対応となると画面を通して印象をよくする方法も今後出てくるだろう。また東京の学校で勉強して東京の会社で就職がこれまで。これからは東京で勉強してオンラインで地方

の会社に就職して、そのまま東京で働く、といったこともでてくるのではないかな。

どういったことがかわってくるのか、少し先のことを視野に入れながら、学科の取り組みを進めていくのが良いのではないかと感じている。

樋口委員(㈱樋口設計):コロナのことはよくわかりませんが、都市計画、中野区駅前開発に関与している。中野サンプラザがなくなり、区役所も移動するなど南口が大きく変わる。このあたりを建築の学生さんにお伝えして、中野を好きになってほしいと思っています。

小椋委員(環境テクノロジー科保護者):コロナになり子供たちの生活は一変した。先生方も大変かと思う。オンライン授業が始まったこと、自宅に居ながら授業が聞けるのが一番の驚き。実験や野外での実習は無理だが、座学は今後このようなやり方を取り入れていくのかと感じている。

渡邊委員(web 動画クリエイター科保護者):子供も2年で卒業となり今回は最後。委員として良い経験をさせてもらいました。小学校教員をしているが、コロナで休校になるのでは?と職員室で話題となったが、文科省は学びを止めないということで、結局休みにはならなかった。ただ学校で先生方がコロナにかかり始めている。その場合代わりとなる教員がいないため、現場は混乱。それが現状である。

白石委員(建築監督科保護者):教育活動に対するオンラインのメリット、デメリットがのべられていたが、企業でも教育現場でも同じかと思う。仕事の上でオンラインになったことで全国横のつながりがやりやすくなった。会議設定しやすくなったため、会議が多くなった。デメリットでは、オンラインが切れた瞬間に関係が切れる。画面ではタイミングがずれるため、会話がかぶることがある。対面だと人の動きが見えるが、オンラインだと逆にコミュニケーションが希薄になるのでは。今後どのような状況となるのか、コミュニケーションをとりながら学びを続けることができるのか?先が読めないのが不安である。人が生で会うことの大切さは大事だと思うが、親としてはコロナの感染がやはり心配。先生方といろいろ相談しながら家庭でもサポートできればと思う。

澤坂委員(㈱アルチザン代表;ゲーム科卒業生):今回の項目個々についての意見はありません。

二つ言いたいことがあります。

一つは東京テクニカルカレッジは攻めている学校だと思う。その姿勢に期待している。

長い期間を経ている組織、企業は次第に保守的になる。今いわゆる有事の状況で攻めているのはすごいことである。結果を楽しみにしている。

二つめは人は欲望に弱い。オンラインは制約がないからどうしても集中できなくなる。

学校や職場は学ぶしかない、仕事をするしかない環境であるから集中できる。

オンライン授業の際のルールを作ることが必要か。服装や、半径2m以内に一切の誘惑物を置かない。誘惑物を隠す。とにかくそれをやるしかない環境に変えることが必要。

学生にその意図を伝える。そのような環境を作る必要があると理解させる。それが必要かと。

自分自身もオンライン中、数時間昼寝したことがある。社員からも集中できないとの意見も出てい。オンラインでも集中できる環境を作る、ルールで縛るなど仕組みを作ることが必要。

安藤委員(㈱miwa):

学びなおしの件、自分はあまり成績が良いほうではなかったが、人の役に立つとは何か?これをずーと子供のころから考えてきた。それで私の今の職業があると思っている。ずっと必死に考えることが重要だが、今会社で人の能力を一つ一つ細かく見てみようかと考えている。八方美人も一つの能力。評価の方法を変えて、一人ひとりの良いところを見つけることを役員や社長の仕事にしようと考えている。

仕事に関係することでは、設計現場によく行っていたがいま現地に行けない。韓国の明洞に現場があるが今絶対検査に行けない。そこでリモートとなるが非常に時間がかかる。またカメラの性能が重要であると痛感。国内の現場でもスタッフに携帯で現場中継しながら物件の説明をした。そこで分かったことは電池が持たない。良いカメラ、電源のバックアップが必要。よく考えたらTVの中継クルーはよくできている。その辺の技術を得る必要がある。中継はスタッフに好評だった。これを発展させ現場から授業できればと思っている。ユーザーさんからどうしても現場を見たいと希望がある。現場で躯体をIpadを使ってとってきてARで書き足して見せる。図面からさらに現物により近づいたものを見せることができる時代になった。中継には自撮り棒が便利でありよく使っている。俯瞰できるとよいので最近ドローンがほしくなった。

リモートの可能性についても検討している。新幹線でやってみたができた。さらに全日空で飛行中にWi-Fiで地上とやり取りできるかやってみたらできた。いまは電話よりもテレビ電話状態で会話している。

リモートでどこまでできるか。授業だけでなく休み時間もオンラインにする。ライブ状態を中継して勝手にそこに入ってくる。もう日常の一部、24時間開いている状態で、そうするとまあ世界がかわるのかなと思う。

渡邊議長(ITbook テクノロジー㈱):コロナ対応のところで、ツリー構造とwebのつながりのお話があった。

現場でいろいろな問題が生じた場合に、指揮命令だけではうまくいかないことが多い。今回学校でうまくいったとのことだが、その理由を明らかにしてそれを学生に伝えられると良いのではないかな。

学生が社会に出て、困ったときに横のつながりが役に立つ。今回の経験を学生に伝えることができれば良いのでは。

白井校長:多数のご意見ありがとうございました。
 コロナの下、どのように生活していくのか考える、自分を見つめなおす良い機会であると思う。
 教育についていろいろな意味で良い機会ととらえている。
 大変な時期であるが、新しいことを発見する機会にもなる。積極的な気持ちでいる。

学びを止めるなどというのは本当に重要である。日本国中の学生は一年間浪人することはできない。
 感染に注意しながら授業に注力している。私たち教員もかからないようにすることが必要。
 令和2年を完結できるようにしたい。注意喚起しながら3月まですごしたい。

攻める姿勢というお言葉いただき、大変うれしく思いました。常に前向きでいたい。
 コロナが終わったときダッシュできるような組織にしたいと思っている。

今回のweb上の体制がなぜうまくいったのか? 先ずほぼ全員が同じ方向を向いていたことによると思う。
 これは自由に物が言える、いろいろな意見が言える環境であったからだと思う。普段から自由に発言できる雰囲気がある。指示しなくてもさっと動ける組織になっている。そこで動けたのかと。

井坂副校長:自由に発言できる環境、そして学科がいろいろあることが良いのでは。
 いろいろな人がいる。ある先生が先頭を切っていろいろなことに挑戦。他の先生も得意なことをもとにいろいろ自由に発言してくれる。
 あと情報リテラシー教育を20年以上やっていたことが良かった。学生全員がパソコンを持っている。
 スムースにオンラインに入っていた。ここが他校よりも素早く対応できた要因かと。

小川事務長:
 イレギュラーなことが起きるとき(今年はコロナ、十年前は震災)、十人十色の対応となる。
 学生、家庭、保護者、我々教職員いずれもイレギュラーなときにいろいろ表に出てくる。困難を乗り越えるときどう動くか。それぞれ自分の得意なものを表に出して動く。これが良いのではと思うようになった。
 事務系の業務では、だめなところを指摘して改善させるというようにするのが常であるが、それよりも一人ひとりの得意なものを組み合わせて業務を進めるほうが効率的である。得意なところを見出してそれを活用していく。切り込み隊長も必要ですし土台を固める人も必要。この一年で特にそう感じるようになった。

渡邊議長:学校関係者として評価したいと思います。徹底的に教育的視点からの改善アプローチであると思います。テクニカルカレッジらしい攻めた改善であり、適切な取り組みであると評価します。
 今後活動の改善努力や計画進捗内容について引き続き公開をお願いしたいと思います。

井坂副校長:スムーズな議事進行ありがとうございました。これをもちまして会議は終了となります。
 今年度の卒業制作発表会、RJP発表会につきましては後程ご案内いたしたいと思います。

白井校長:最後にご挨拶させていただきます。
 本委員会は任期2年で、本日の会議が最終ということになります。2年間本当にありがとうございました。できれば学習成果報告会という形で成果を発表させていただきたいと考えております。
 その際はぜひご参加いただければと思います。

本日はお忙しい中ご審議いただきましたことお礼申し上げます。
 ありがとうございました。

以上

議事録署名人

印

印